

郷土の証言

十九歳の軍隊生活

齊木 信道

(一)
私の両親は、父が昭和六年(一九三二)に四十六歳、母が八年に三十三歳で他界した。祖父母は健在であったが、老齢であった。このため、兄は、家庭を支えるため祖父母の薦めで十七歳で結婚した。しかし、すぐに徴兵検査に合格して旭川第七師団に入隊した。激戦の南方戦線に派兵され、肩と足に負傷して、昭和十七年(一九四二)に北海道へ戻った。

次兄は、昭和十八年(一九四三)に志願して福島県郡山海軍航空隊に入隊した。そして、私も十九年(一九四四)十二月に繰上げ徴集兵として北支要員で旭川第七師団へ入隊した。ほぼ同じ時期に男三人が兵隊に取られた齊木家には老祖父母と兄嫁、幼い子ども三人が残されたが、兄嫁は男勝りで、朝早くから自分で馬をあやつり畑仕事全般を切り盛りしていた。

(二)
十九年、大東亜戦争のもっとも激しい時に若

い兵隊不足で徴兵された私は、その時十九歳(大正十四年生まれ)でした。新得からの同年兵は若杉繁雄、中野藤次郎、屈足から長野清勝と私の四人でした。出征することになって役場の兵事係(石本洋氏の父)から激励の挨拶を受け、勇躍旭川第七師団へ入隊する。我々の入隊をあらかじめ知らされていたのか、赤紙召集兵で先に入隊していた新得出身の大先輩たちが営門まで迎えに出てきてくれた。迎えてくれたのは鳥本金松、山本清、匂坂一男の各氏で、知らない土地、軍隊で地元の方と会えたことにうれし涙を流したのであった。旭川第七師団には一週間いた。その間に身体検査があったが、十二月の寒波の中、素裸の検査であった。全道から五十名以上が検査を受けたが、当然全員合格であった。さらに、基礎訓練や軍人としての軍律など徹底的に教え込まれた。着ていった服など私物は、すべて軍服に着替えさせられた。履き物は軍靴かと思つたが、地下足袋であった。寸法が自分の足に合わず困っていたら、上官から足に靴を合わせるのではなく、靴に足を合わせる言われた。我々に与えられたものはすべて一時的なもので、銃も弾丸も擬装されたものであった。こんなことでは戦いに勝てるはずがなく、負けてもしかたのない装備類だった。

(三)
一月二十四日、北支から初年兵を受取りに来た小口少尉から営門に集合するように号令があり整列すると、次のような訓辞があった。「貴下等は只今から祖國を離れ戦地に向かう。二度と祖國の地を踏めない者も出ることを望む」北支へは九州からの派兵になるため三日間かけて旭川から九州まで行った。三日目の夕方、到着してすぐに貨物船に乗船して、朝鮮釜山港に着いたのは朝方であった。戦況が厳しくなつていき、夜になつてから動

物に乗せるための箱型の貨物車に押し込まれ、北支の新郷という駅に到着した。新郷から道のないところを十日間、敵を避けて夜だけ歩いて開封に着いた。

開封に二、三日滞在して、今度は上陸用船艇で運ばれ、ようやく我が隊の本拠地許昌に着いた。本拠地は三八六大隊といわれ、隊長は鈴木大尉であったと思う。この大隊には、歩兵班、軽機班、擲弾筒班、通信班があった。

私は、兄から入営時の心構えなどを良く聞いていた。また教科書をもらつて猛勉強していたので、初年兵の覚えることをすべて丸暗記した。初年兵は三ヶ月の教育期間があった。しかし私になるよう指示された。中隊長に申告して開封の陸軍病院へ転属した。衛生兵の教官は中尉が大尉で、毎日包帯の巻き方や人体の模型を使つて名称を覚えることなどが日課であった。時には負傷して入院している兵隊の治療を実際に見せてもらつて訓練した。

三ヶ月の衛生兵の講習を終えて中隊に帰隊した。中隊長から、大隊本部に入つて活躍するのが望ましいとの話があり、大隊本部に移動した。本部の衛生班には軍医中尉を中心に衛生班長、衛生上等兵、衛生一等兵がいて、その仲間になった。

北支は衛生環境が劣悪で赤痢が多く、さらにマラリア、性病患者もいて、消毒液を作るのに毎日が大変であった。また、夜中に発熱でうなされる者や訳もなく起き出して他人の部屋に入り込む者がいて、自分の仮眠もできない毎日であった。

衛生兵としては患者の看護はもちろん上官であれ一兵卒であれ話しを聞いてやるのも仕事であった。毎日が多忙であったが、私は与えられた衛生兵としての仕事を黙々とこなしていた。ある日、中隊長から話があり、部隊長が齊木の頑張りほめていた、と。それから一週間

状を受けることになりました。今まで部隊長からこのよう表彰はなかったようで周りから羨ましがられました。

(四)

表彰されてから間もない四月末か五月初めに、突然初年兵集合の号令がありました。集合して整列点呼、引率されて着いたところは兵舎から三十分くらいのところであった。そこで穴を三ヶ所掘って、その日はそのまま帰隊した。翌日は検閲前ということ朝から休養日になり、兵器の手入れや被服の洗濯などをやった。苦しい軍事教育も明日の検閲で終わりと思うと嬉しいやら楽しいやらの中にも一抹の不安も加わり複雑な気持ちであった。

夕方になり、そろそろ飯上げの時間になったと思っていたら、またしても初年兵集合の号令がかかった。なにか悪い予感がしたが、隊列を組み前進して、前日掘った穴まで行く。古年兵の話によると、この穴は敵方スパイの処刑のためのものであり、検閲前の初年兵の度胸試しのプレゼントだともいわれた。捕虜になっていたスパイが一人一人引き出されてきて、古年兵が注意深く身体検査をする。我々初年兵は刑の執行要員であり、上官の命令は絶対服従である。これが初年兵の宿命であった。

いよいよ日が沈み、執行時間が迫ってくる。周囲は嚴重に遮断され、監視の目は厳しくなってきた。「殺伐！」の号令がかかる。上官の命令とはいえないなんともいえず複雑な心理状態の上、無我夢中で次から次と刑の執行が行われていった。暗黒の夜、ローソクの弱い光りの中で百鬼夜行呪われる残酷な刑が続く。血なまぐさく、銃剣の一突きで自ら壕に落ちる者、日本刀で首が斬られそれが二ヶ所先まで飛んでいく。二十七名が執行された。

刑の執行後、相当量の土砂を掛けたが、隆起した土盛りは今でもこの世とは思えない地獄図である。残務整理は古年兵が行い、夜九時頃に

帰隊した。初めての光景に我々初年兵はしばらくは飯がノドを通らなかつた。

このあと、次の軍事作戦があり、今回処刑の責任者や兵隊の多くが戦死、我々初年兵にも負傷したり戦死した者がいた。

(五)

終戦後の八月十六日以降は、まだ政府軍と八路軍の内戦が続いていたが、我々日本軍は、政府軍の捕虜となっていた。捕虜には若干の労働が課せられ、少なかつたが賃金も与えられた。サツマイモや小麦パンなどが、主食であった。捕虜生活から解放され、北支から日本に帰還する時は、すべての物の持ち帰りはできず、昭和二十一年（一九四六）五月一日、上海から舞鶴に帰ってきました。

私は衛生兵であり、刑の執行現場を見ていただけであつたが、当時のことを思うとただただ処刑された敵兵のご冥福を祈るのみです。

二十五回の戦友会をやりましたが、最後の会ではトムラウシ山を背景にした記念写真を撮りました。今は戦友もほとんど他界しています。敵味方、個々にはなんの恨みもない。しかし、やらなければやられるのが戦場であり、国家の戦争ほど残酷なものはありません。日本人として忌避のできない義務とはいえ、十九歳には過酷な兵役であつた。



新内郷土史料収蔵庫
収蔵番号一五四号「酒樽Ⅱ陶製」



大正三年（一九一四）の第一次世界大戦を契機に町内でも農産物の輸出が盛んとなり好景気の時代となつていった。同時に開拓者や人口の増加に伴って、当時の番外地一帯は店が軒を並べ賑わいをきわめた。

街の繁栄に目を付けた脇清吉は幕別から番外地に移住して新得酒造会社を立ち上げ、湧水を利用した地酒の販売をはじめた。

地酒は、写真の「狩勝」をはじめ、「国境正宗」、「国華」、「花心」、「北の泉」などの銘柄があつた。

酒造会社付近には菊地商店、児玉料亭、平塚装蹄所、広瀬雑穀、橋井鉄工、増田木工場、大藤精米所、小山雑貨店などがあり市街地を形成していた。